

# 北海道大学（2019年リーグ戦優勝）

快晴に恵まれ、真夏を思わせる陽気となった7月18日、土曜日。札幌市北区の北海道大構内の陸上競技場。短パンとTシャツ姿の北海道大アメリカンフットボール部員が3人、トレーナーの指示を受けながら、ダッシュやアジリティートレーニングに汗を流した。地面に並べた器具を使い、小刻みなステップを繰り返して脚力を強化する。陸上競技場に隣接するポプラの防風林の前では、別の4人がランニングに続いて体の筋肉を強化するトレーニングを繰り返していた。木陰に円陣を組み、トレーナーの合図で体を動かす。東京から駆けつけた村井公寿監督（42）が、コロナウイルスに翻弄されながらも、再開した合同練習で懸命に汗を流す選手たちを見守った。

2年生以上の選手数が39人。スタッフを入れると55人の大所帯となる北海道大。春のシーズン開幕に向けて体力強化中の2月28日に、道がコロナウイルス対策で緊急事態を宣言して、練習中断を余儀なくされた。国の緊急事態宣言、課外活動を禁止する大学の行動指針の発表と続き、我慢の日々が始まった。3月中旬、吉川侑照主将ら4年生14人と村井監督が話し合い、リモート練習を始めた。10人単位の組に分け、週4回、自宅をパソコンでつなぎ同じ筋力強化メニューに取り組む。励まし合っただけの練習だ。吉川主将は「日本で一番早く自粛したのが北海道。最後のシーズンなのであせりも感じたが、嘆いても仕方が無い。シーズンがいつ来てもいいように練習するだけ」と当時を振り返った。

4年生たちが筋力強化とともに気にかけてくれたが部員のモチベーションの維持。攻撃リーダーの中牟田晃基副将（4年）は「RB同士でオンラインの練習を行い、6月からは公園に集まりハンドオフも始めた」と仲間の結びつきを心がけた。LBの内橋宏太郎副将（4年）も「週1回、トレーナーやマネージャーも交えてLBのパート別のリモートミーティングをやっている」という。テレビの話題も出てくるなど、先輩と後輩の絆を確かめる時間だ。

7月10日付で大学の行動指針が緩和され、個人練習に限定されるものの、屋外施設を使っただけの練習が認められた。11日から再開され、5回目の顔合わせとなった18日の練習。「5人程度」が個人練習の目安のため、少人数グループでのト

レーニングになったが、選手8人、スタッフ1人の新生も加わり明るい話題も加わった。

吉川主将は「実は12日に、仙台で東北大と定期戦を予定していた。去年のパンボウルで破れた東北大を下し、秋に向けたチーム作りの基礎を固めたかった」と残念がった。コロナウイルス対策で今冬的全日本大学選手権の中止も決まり、甲子園ボウルへの道も消えた。「地方からアメフトを盛り上げるためにも甲子園ボウル出場が夢だった」と吉川主将。「秋のリーグは全勝で連覇し、もう一度東北大とやりたい」と力を込めた。村井監督も「頑張っている4年生のために、甲子園ボウルがなくても、日本学生協会が代わりの大会を設けてくれたら」と願った。



【少人数のグループで練習に汗を流す北海道大アメリカンフットボール部員】

